随　想

わ が 半 生 の 記

——夏の思い出——

俵　隆治*

風薫る新緑の，この頃ともなると，人の心も晴れやかに軽くはずむが，もの心ついて半世紀の私にも，憂きこと，楽しきことの夏の数々の思い出がある．

それは，今から 47 年前の大正6年7月のことである．当時，北海道長官として単身，札幌に赴任していた私の父から，東京に住んでいた私達兄弟3人に，従兄など一緒に北海道に遊びに来てもよいと許しがでた．私は小学校3年，中学4年生の長兄2ツ違いの次兄らとともに，とに角親の付添いのない汽車旅行は初めてで，全く楽しいものであつた．

上野駅を午後1時に立つて，仙台がもう夜おそく，駅前の赤や青のイルミネーションがとても綺麗であつた．フト目が覚めると汽車は相変らず走つており，広い牧場の彼方の地平線から真赤な太陽が昇ろうとしているのをうす暗い2等寝台の窓から眺めた風景が，妙に目頭に浮んでくる．

札幌はまだ市内電車がなく，馬が曳くいわゆる馬鉄が大通りを走つていた．自動車の少ない頃で，2頭立ての馬車で北大農学部のポプラ並木や，月寒の牧場を見に行つたときの，カラン，カランと鳴る馬車につけた鈴の音がいまだに耳朶に残つている．それにも増して強く印象づけられたのは，日本製鋼所室蘭製作所の見学であつた．そこでは当時，まだ45，6の少壮教授であつた東大の俵国一叔父も同行してくれて，一緒に工場を案内され説明もしてくれた．赤く溶けて流れる鉄や，構内を走る汽車，さては今しも磨き上げられたピカピカの12吋の戦艦の主砲などを目近に見て，すつかりド肝を抜かれ，息のつくのを忘れそうな強い感銘を子供心に焼付けられた．小高い丘の上にある洋館で，当時，珍らしかつた西洋料理の御馳走になつたのも，矢張り忘れられない思い出である．今にして思えば，小学3年生の見学者など，随分工場で御迷惑であつたと思うが，当人にとつては，苫小牧の王子製紙や，サッポロ・ビールとは違つて，まことに驚異であり，後年，鉄鋼に身を立てる縁ともなり，鉄鋼工場監督が私の仕事となつた鉄鋼工場見学第1号ででもあつた．

昭和6年7月，東大冶金の学生であつた私は，2年生の実習に釜石鉱山，釜石鉱業所を選んだ．数人の友達と荷物は索道に預け仙人峠を歩いて越えた．前年同所に実習に行つた先輩から，中田義算技師長に初対面の挨拶には，「工場に入る時，平炉の煙突の煙の色はどうだつたか」と聞かれるゾなど，威かされた．しかしそんな質問もなく，「去年の学生は，昼間から川でボートに乗つた奴がいた．しつかり実習せにやいかん」と簡単な訓示で終つてヤレヤレであつた．川村吟次郎さん，入社してまだ2年目の和田亀吉さんなどが実習生の指導役で，色々御世話になつた．実習中に桂弁三先生が来られ，引率者の田中清治助教授と，みんなで一緒に食事を頂いたが，平素の講義にもない書道のことなど御高説を伺つた．実習中の宿となつた鈴子旅館では，漁船が入港すると好きな鮪でも毎日のように続いて，いささか閉口したこともあつた．帰りの北海道旅行に，釜石港から石炭貨物船で室蘭に行く計画が駄目になり，花巻に一ト晩泊つて，汽車で室蘭，輪西とお決りの両工場に御邪魔した．近藤八三さん，芹沢正雄さんなどに御世話になつたが，これらの先輩には，それ以来ずつと今日迄御厄介になりつぱなしで，ここに

* 本会常務委員，前理事
日本精密管工業株式会社社長，前住友金属工業株式会社東京支社技術部長

改めて30数年間の御礼を申述べたい.

ときは過ぎて昭和19年，それも，もう2タ昔前のこの頃のことである．私は10年程勤めた住友金属工業，鋼管製造所から商工省に出向してすでに2年あまりが過ぎていた．戦線の進展に伴つて軍需省となり，私も軍需監理官として大阪軍需監理部に勤務，一般機械課長を命ぜられていた．生産会議で東京に出張中，4月中旬に赤坂新坂町の自宅で召集令状を受けた．緊急要員として手続してあつたのに，何かの間違いかと，ときの軍需省機械局，玉置敬三機政課長に応召解除の手続の懇請も空しく，補充兵役陸軍2等兵として麻布6本木の近衛歩兵3連隊の営内に囚れの身となつたのは，それから5日後のことであつた．

太平洋戦争も漸く決戦の形相を呈し，硫黄島に1機と敵機来襲の情報でも入ると，忽ち新兵の訓練は中止して帝都防衛の非常態勢がとられた．召集解除の進まぬ私に対し，中隊長も特別の計いで教練を免除し，中隊事務室の勤務にしてくれ，専ら転属する将兵の功績薄に部隊長の所見を追記したり，練兵休の兵隊を治療所に引率することなどが日課となり，便所掃除や食罐運搬使役は間もなく免かれた．営庭の桜の若葉も日増に色濃く，青葉の梢を渡るそよ風も，この頃のように肌に心よかつたが，召集解除の手続はどうなつたか，焦慮の日が続いた．軍需省の重要資材の生産担当事務の末端ながら一役を負わされていた監理官が，習志野演習から帰つた泥にまみれた新兵の襦袢(じゆはん)袴下(こした)の機械洗濯場で石鹸の泡に交つて浮ぶ虱をすくつたり，物干場監視に毎日を送つているのは，満洲の曠野なら諦めもつこうが，帝都の真中，近衛部隊の内では全く慨嘆に堪えない思いであつた．

かくして日を過すこと3ヵ月，中隊事務室で見付けた新聞記事で父の死を知り，中隊長の計いで一週間の外出が許された．築地本願寺での葬式に出られたのは幸であつたが，漸く自由になつたわが身で直接軍需省に出向き，召集解除の手続を進め，漸く晴れの除隊となつたのは7月末であつた．

その頃はすでに連合軍の本土上陸に備えて，大阪には近畿総監府が置かれ，軍需監理部もその指揮下に入つた．昭和20年3月空襲で大阪市の大半は焦土となつたあと，私は志望して6月末に福井出張所勤務となつた．福井市に着任した前日，同市も大空襲を受け，私がリュックサックに鞄一つ下げ，屋根も改札口もない福井駅に降り立つたときは市街にはまだ余燼がくすぶつており，日影すらない町をさまよつて，このときほど途方に暮れたことはなかつたことをまた想い出すのである．

福井で終戦を迎えた私は，仕方なく一時，福井県商工技師として経済部商工課に勤務したが，翌21年3月また商工省に戻り，近畿商工局金属課に籍を置くこととなつた．それから後，通商産業省大阪通商産業局となり，私はその後金属課長として，主としてマックアーサー元帥の日本占領政策により休止された関西地区の製鉄，製鋼，非鉄金属工場の民需転換許可に関する事務のお手伝いができ，重工業再建にいささかでも御役に立つたと今日回想して自から慰さめられるものがある．

その後，昭和27年5月，住友金属工業に復帰し，東京の技術部などに勤務して鉄鋼協会のお手伝いをするようになり，理事として，また常務委員として企画委員会やその他共同研究会にもしばしば出席させて頂くようになつた．

今や，わが国の鉄鋼生産は，終戦の年の製銑107万t，粗鋼127万tから躍進して，昨年度製銑2,100万t，粗鋼3,400万tを越え，米国，ソ連に次ぐ第3位を占め，世界に製鉄日本の名を高めている．私が初めて日本製鋼所を見学した大正6年は製銑67万t，粗鋼157万t，太平洋戦争末期の日本が死命を賭した昭和19年が製銑353万t，粗鋼672万tと比較して，まことに目を見張る激増振りに，ただ驚き入るばかりである．

私は，ここに随想を乞わるるままに，自からの半生を想い返して徒に紙面を汚したが，私のもの心ついてからの50年が矢張り日本の鉄鋼50年の歴史に，何かと関係づけられていることに気付いて，改めて感じ入つている次第である．

私はこの「鉄と鋼」誌が刊行される頃は，再び住友金属工業会社を辞して，名もない鉄鋼二次製品を生産する会社に勤務することとなる．これが御挨拶ともなつて申訳けないが，私は次の新しい人生に矢張り鉄鋼人としての誇りをもつて，取組むことのできる喜びのあることを申述べて，ここに筆を擱くものである．